

仏 の 願 い

平成 28 年 西雲寺だより 秋号 (48 号)

 **報恩講のご案内** 

10 月 17 日 (月) ~ 19 日 (水)

17 日 お逮夜(2:00~) お初夜(7:00~)

18 日 お日中(10:00~) 大逮夜(2:00~) お初夜(7:00~)

19 日 満日中 (9:30~)

法話 山中温泉 日下賢城師

(18 日お日中より)

——18 日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発(8:50)~東別院前~工大温泉前~西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)~国見~鮎川~小丹生經由



ご本山 アンケートご協力のお願い

裏面 (6 ページ) をご覧下さい。

釈尊の生涯とその教え④

悟りへの道

禅定の道

当時のインドでは、生死の苦悩から解放されて、本当の自分に生きることを求めて、修行する人々を沙門といい、その修行方法には二つがあった。禅定と苦行である。この二つに共通していることは、人間は肉体と心との二つによって成り立っているということである。

禅定とは、座禅のようなもので、心を静めることによって、外から心を動揺させるいろいろなことから離れようとする、心を動揺させる最大のもは肉体である。だから心を肉体から離して、肉体の支配の及ばない高い世界に向け、統一して純粹にしていく、動く心から動かぬ心へ、そういう方向を求めるのです。出家されたお釈迦さまはまず禅定の道から修行に入られました。仏典は次のように記している。

私は老病死の不安のない境地を求めて、二人の有名な師についた、その一人の師のところに行つてたずねた。「師が悟られた境地はどのようなものですか」と、師は「私は何も所有するものはないです。苦しみの対象もないという境地を悟りました」と答えた。程なくして私は師と同じ境地に至ったが、これはその時だけのもので真実の境地ではないと悟つて、師のもとを去った。私は次に、二人目の師

のところへ行つてたずねた。「師が悟られた境地はどのようなものですか」と。師は「私は有るとも無いともいえないような無念無想の境地によって判断し、苦しむ心を無くすことを悟りました」と答えた。私は程なくして師と同じ境地に至つたが、「これもその時だけのもので、真実の安心の境地ではないと悟つて師のもとを去った。

苦行の道へ

禅定では老病死の苦悩から解放されることはない。悟つたお釈迦さまは、尼連禅川の清流が流れている近くのうっそうとした林を修行の敵地に定められた。林の中は苦行林とよばれ、多くの修行者が、それぞれの方法で苦行に励んでいた。

禅定は、体はそのままにして、心を肉体的に制限をこえたところにおくが、苦行は積極的に肉体を苦しめて、肉体の力をそぎ、肉体から心を解放させようとするものです。苦行の多くは断食です。断食をして徹底的に体を弱らせるのです。そのことによつて精神の作用がものすごく凝縮されてきて、特殊なひらめきが起つたり、今まで気付かなかつたことが気付いたりするので、断食といつても全く食べないのではありません



「釈迦苦行像」パキスタン・ガンダーラ出土 ラホール博物館蔵

ん。一日に一食を取り、また半月に一食、一ヶ月に一食を、そして遂に完全な断食をするのです。お釈迦さまは断食のほかにイバラの床に伏したり、ある時は薪を積んで炎で身をあぶつたり、またある時は呼吸を停止することを試みました。こうしてお釈迦さまの手足は枯れ草のようになり、背骨は浮き上がり、肋骨が突き出し、瞳は落ちくぼんで、深い井戸に宿った星のように輝いたといわれる。

六年間の厳しい修行にお釈迦さまは身も心も疲れ果ててしまわれましたが、真理を悟ることはできませんでした。身体を苦しめるだけでは悟りの境地に達することはできない。真理は精神の素晴らしい働きによつてのみ発見できる。お釈迦さまは六年間の苦行を棄てる決心をされました。仏典には次のように記されている。

たとえ、大樹を切り倒したとしても、その根を断ち切らねば、樹木は再び成長する。それと同じく限りない欲望の根源である闇を消し去らねば、この苦しみは再び繰り返される。

私たちのさまざま苦しみや悩みは、一見すると心の持ちようによつて解決するよう見えたり、身体を鍛えることによつて解消するよう見えるが、決してそうではないということが明らかになったのです。

苦行を棄てたお釈迦さまは、ガンジス川の支流、尼連禅川に沐浴して身を清め、木の根にすがって岸にのぼろうとしましたが力がまったりと失せて上がる事ができませんでした。その時、天は河端の樹の枝を垂れ下ろしてすがらせ、岸に上らせました。

その時、村娘のスジャーターが、衰え果てたが、けだかい修行者を見て敬い心をおこし、乳粥をささげました。お釈迦さまはこの供養を受けると、やわらかな乳粥が体の中に流れこみ、みるみる気力を回復された。これを見た五人の仲間はお釈迦さまは墮落したと思つて、彼を置いて遠く去つてしまつた。お釈迦さまは一人歩き出しました。尼連禅川から二百メートルほど西に、四方に枝葉を広げた巨大なピツパラの樹（後に菩提樹と呼ばれる）がありました。お釈迦さまはこれこそ修行にふさわしい場所だとお考えになり、その樹下に静かに端座されました。ちょうどその時たまたま通りかかった牛飼いの少年が刈つた草を施してくれました。お釈迦さまはその草を座具として敷き、思念せられるには「もはやほかに求むべき道はないとすれば、直接この生死の問題に対決して、そこに道を求むるよりほかはない。幸い牛飼いの少年が草をほどこしてくれた。この草を座として、正しい覺りを開くまではこの座をたたぬことにしよう。一切衆生の生死を、私は必ず抜きとろう。それまではこの座をたつまい」としてお釈迦さまは瞑想に入られました。

内観の道

私たちは悩みや苦しみの原因を外から来

るものと考えます。しかし苦の原因となるものは、自分の外にあるものでなく、自分の内にあるものであり、何が本当に自分を苦しめているのか、苦しんでいる自分は何かを明らかにするのを内観といいます。お釈迦さまは、今まで誰もなさなかつた苦の因を明らかにし、その苦の因の滅する道を求めて瞑想に入られたのです。お釈迦さまのお悟りは内観による深い瞑想によつて開かれたのです。

魔との戦い

お釈迦さまがピツパラ樹のもとに端座して瞑想に入られると、お釈迦さまの成道が近いことを知つた悪魔が、これを阻止するためにさまざまな妨害をしかけてきたといわれます。最初には美しい魔女を派遣し、次いで武器をもつた軍勢を率いておそう、それも効果なしとみると、次は甘い言葉でもつて誘うというふうに手をかえ品をかえて、お釈迦さまの心を動かそうと必死の戦いをしかけてきたのです。お釈迦さまは深い瞑想のなか、そのような悪魔の誘いと必死に戦われたのです。そして正しい智慧によつて悪魔の正体が明らかになつた時、悪魔よ、汝は敗れたり

と叫ばれ、悪魔は退散したのです。お釈迦さまはことごとく悪魔を亡ぼし、最後の瞑想に入られました。お釈迦さまのお悟りを妨げようと必死になつた魔とは一体何なのか、経典には悪魔に対するお釈迦さまの言葉として次のように記している。

悪魔よ、汝の第一の軍勢は快樂である。

第二は不平不満である。第三は飢えである。第四はむさぼり、第五はなまけである。第六は恐怖心、第七は疑いである。第八は虚栄心、第九は名誉欲、第十は傲慢な心である。悪魔よ、これが汝の武器である。

この言葉によつて、悪魔という外の形で、お釈迦さまのお悟りを妨げようとしていたものは実は内なる自分の心だったので。経典はさらに次のように記している。

魔よ、世間の人々も、神々でさえも、おまえの軍勢を打ち負かすことはできないが、私は智慧によつておまえの軍勢をたやすく打ち砕く、あたかも炉で焼く前の器を石で砕くように。

私たちが魔を破ることができないのは、魔が自分の外側にあると思つているからです。その誤りがお釈迦さまの内観の智慧によつて明らかになつたのです。この点が自覚されない限り、私たちは何事も他人のせいにして、大切な自分自身の人生をきちんと受け止めることができないのです。

成道

お釈迦さまが自分を襲つてきた悪魔を撃退され、お釈迦さまの精神の働きは頂点に達しました。その時、偉大なお悟りの瞬間が静かに訪れました。お釈迦さまは佛・釈尊となられたのです。十二月八日の明け方の星がひととき美しく輝きました。（住職）

福島と熊本の被災地の 子供たちを招きました



お寺でカレーを作って食べました



毎朝、みんなでお参りしました



1週間目（10人）・2週間目（6人）が宿泊



元気のある子は朝5時半からお鐘つき！

永代経が つとまりました



いただいた野菜でおときの準備です



野世信水師



筆頭総代末定育雄氏



若い方も年配の方もまたおそろいで！



梅雨の晴れ間に恵まれました

報恩講をいつとめる

浄土真宗を開かれた親鸞聖人の恩徳を報するため、毎年聖人のご忌日（十一月二十八日）に勤める真宗において最も大切なご仏事です。真宗門徒にとつて一年は、報恩講に始まって報恩講に終わるといつてもよいでしょう。

聖人は九歳の時、出家得度され、二十年間比叡山において勉学と修行に励まれました。しかし身に具わった煩惱は如何ともすることかなわず、また女人や一般庶民を差別する比叡山に失望し、山を下りられました。そして吉水の地で専修念仏のみ教えを説いておられた法然上人のもとを訪ね、「雑行を棄てて、本願に帰す」と回心されたのです。雑行とは分別や計らいの雑った自力の行のことをいいます。聖人は自力の行では、救われないことをさとり、弥陀の本願と、その行、南無阿弥陀仏に生きる身となられたのです。そして阿弥陀の本願を説かれた『大無量寿経』こそ真実の経といただかれ、そこに説かれた本願の真実と、その真実に照らし出された罪悪深重の私たち凡夫の迷い・苦悩を、九十歳という長い人生を尽して明らかにして下さったのです。聖人は三十五歳の時、ご流罪にあわれ、越後に流されました。流罪を許された後、二十年間関東に居住し、民衆と生活を共にしながらお念仏のみ教えを説いていかれたのです。

私たちは親鸞聖人の九十年にわたるご苦勞によって、今、お念仏を申し、お浄土を願って生きるご縁に遇うことができましたのです。まことに不思議なご縁です。

私たちは老病死という限りある身をかかえて、どう生きてらよいかとたずねる時、まことに愚かな凡夫です。この凡夫の身に、後生の一大事を問いとして聞法させていただきましょう。（住職）

素朴な疑問

家族葬って？

業界トップクラス
家族葬の格安プラン
内容充実・低価格・高品質

家族葬

今まで、身寄りのない方が亡くなると、身内数人だけでお葬式をしてきましたが、最近はそのやり方が一般にまで広がっています。

年間 300 件の家族葬を手掛ける業者さんが仰っていました。「家族葬をした後 10 軒のうち 8 軒は後悔なさってます」これは私も身をもって体験していますが、皆さんはいかがですか？

願

法名に 育てられる

<読み方>…がん

<意味>…願望・愛すること

願うということは、望むことであり、欲することですね。ですから、この字は「欲望」を意味します。

問題はただひとつ、どこから湧いてくるのかだと仏教は教えます。「先人（ほとけさま）の後ろ姿を念じて湧いてくる欲望」これが法名の願の意味です。

ご本山のアンケートにご協力ください



- ・ご自由にご意見をお書きください。
- ・ハサミで切り取ってそのまま投函してください。
- ・切手は貼らなくても大丈夫です。

- ・お名前を書く必要はありません。
- ・あてはまるところに丸印を付けるだけです。
- ・質問と回答欄は同じ色になっています。

発行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺
住職 護城一寿
筆頭総代 末定育雄
編集責任者 護城一哉
〒910-3523 福井市武周町5-2
電話 0776-97-2138
メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
郵送でもメールでも構いません。お
待ちしております。